

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

学術研究としての表現実践に向けて〈共同研究：
拡張された場における映像実験プロジェクト〉

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2022-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 瑞穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009958

学術研究としての表現実践に向けて

藤田 瑞穂

人類学的な調査をもとにした芸術表現や、写真、映像、音楽などの表現手法を用いた学術研究など、従来の専門領域を超えた手法をとる活動はもはや珍しくない。本プロジェクトでは、アートと人類学の接近がしばしば論じられるなかで、多様なメディアを用いて研究を行う人類学者、人類学的な視点をもって芸術的活動を行うアーティスト、キュレーターが集い、今日における「映像」をいかに捉え、その定義をも拡張し、可能性を問うことができるかに挑んだ。

「映像」を捉え直す

2018年10月から2019年3月の初年度は、メンバーの一人である西尾美也のアートプロジェクト《感覚の洗濯》(2016年から継続中)を例に、映像による記録と、それを用いて物語を語ることをおこなった。《感覚の洗濯》とは、洗濯という日常的な行為を新たな視点で捉え直してアートのワークショップとして公共空間で実施するプロジェクトで、「洗濯の音楽」「洗濯の展示」「洗濯の花見」「洗濯の写生会」「感覚の試着」の5つの工程から成る。初回となったさいたまトリエンナーレ2016では、会期前のイベントとしてこのワークショップを実施し、展覧会では記録撮影データを編集してナレーションを加え物語化した映像がインスタレーション作品の一部として展示された。研究会では、この映像を上映するとともに、撮影・編集を行った西野正将(美術家/映像ディレクター)を特別講師として招聘し、映像を用いた言語/非言語による二次的な語りの可能性について議論



藤田瑞穂・矢野原佑史編著『im/pulse』(京都市立芸術大学、2020年)書影(村津蘭「死者と生者の交感—ベナンの仮面結社とジェラーの死」pp.130-131、仲村健太郎撮影)

した。映像で物語するという行為自体はアートと人類学のいずれの領域においてもなされることだが、学術研究、芸術表現というそれぞれの枠組みに照らし合わせてみると、語りのあり方が異なる場合も多々ある。表現実践の場の拡張を目指す私たちの研究にとって、異なる領域を隔てる境界線について改めて考えることは、非常に重要な第一歩となった。

2年目となる2019年度には、共同研究員ならびに5名の特別講師による研究発表を9件実施した。「映像の可能性/不可能性」「映像記録の加害性」「映像アーカイブと現在」などのテーマに加え、必ずしも動画のかたちをとるものではないが、時間の経過をとともなうイメージなど映像的な事象についても取り上げ、意見を交わした。同じ場所に集まり、同じ物事について考え、参加者それぞれの知見が共有されることで、私たちの考える「映像」の定義は拡張されていった。結論が簡単に出るはずのない事柄について長い時間をかけて話し合った結果、狭義には「映像」とは呼ばない事柄に関しても、それが「映像」となり得るか否かの基準のような共通認識が生まれたのである。小さなことかもしれないが、異なる専門分野を持つ者が集い「ともに」研究することの醍醐味は、まさにこういった視点の共有からはじまるのではないだろうか。

またこの年度にはメンバーの研究成果として2冊の書籍が刊行された。1冊目は、映像人類学の革新的試みとして、新たな語りと問題提起を目指した『あふりこーフィクションの重奏/遍在するアプリカ』(川瀬慈編著、新曜社、2019年)(本研究会においてこの書籍が人類学においてどのように評価され得るかなどの意見交換も行った)、2冊目は、アートと人類学のコラボレーションとしての映像実践を書籍のかたちで収録した『im/pulse』(藤田瑞穂・矢野原佑史編著、京都市立芸術大学、2020年)である。この2つの取り組みをさらに発展させ、最終年度に向けて、タイトルにもある「実験」的な取り組みを模索しようとしていた矢先、新型コロナウイルス感染症の大流行によって、世界が大きく変わってしまったのだ。

コロナ禍とオンライン

社会がめまぐるしく変化し、さまざまな物事がオンライン化されていくなかで、これまで以上に「映像」は世に溢れることとなった。この研究会も例外なくオンラインで実施され

藤田 瑞穂 (ふじた みずほ)

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA チーフキュレーター／プログラムディレクター。専門は現代美術、表象文化論、アートマネジメント。近年のおもな展覧会企画に、mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ?)」(2022年)、グスタフソン&ハーボヤ「Becoming—地球に生きるための提案」(2021年)、ジョン・ジョナス京都賞受賞記念展覧会「Five Rooms For Kyoto: 1972-2019」(2019-2020年) などがある。

たため、私たちの会合自体も「映像」化されながら進行したということになる。この状況下で、改めて「映像」をどのように捉えるかということがたびたび議論の中心となった。フィールドワークの実施が難しく、研究計画の延期・変更を余儀なくされたメンバーも少なくないが、意欲的かつ萌芽的な研究が多数報告され、また活発に意見交換も行われた。

しかし、オンラインだけでは会議のスタイルで研究会を続けるしかない。「実験」的な実践をともなう取り組みを進めるのがきわめて困難であるだけでなく、対面の会議と比べても、議論を拡張させることに限界を感じざるを得なかった。そこで研究期間を1年延長して、「拡張」「実験」をキーワードにこの研究会によって新たに生まれた視点に各自の研究をつなぎ合わせて論考し、それらを学際的な共同研究成果として書籍化することを当面の目標とした。広義の「映像」に関する将来的な展望をどのように示すかを継続的な課題として、オンライン研究会を重ねた。

結局、最終回に至るまで遠方の参加者を含む対面研究会の実現が難しく、研究会の場での偶発的な交流、協働作業や、何らかの実践的な取り組みが生まれる機会は失われたままだった。それは学術研究の領域を拡張し、表現実践に協働して取り組む「実験」が先延ばしになることを意味した。共同研究という制度に対しての「実験」でもあっただけにきわめて残念だが、書籍化に向けての準備を進める過程で個々のメンバーとの議論を重ねる度に新たな知見を得る機会がもたらされ、また今後の新たな研究の萌芽となるような発見が多々あったのは幸いであった。

研究会の場からは離れるが、共同研究に関連する筆者自身

の実践として、想像を喚起する言葉やイメージ、そして歴史のなかに埋もれてしまった小さな出来事に意識を向け、全感覚を傾けそれを聴き、探究するアーティストのmamoruと協働で取り組んだ、アーカイブに関するプロジェクト「おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ?)」(2022年)を挙げておきたい。このプロジェクトは、筆者が構成する京都市立芸術大学の前身である京都府画学校の教育アーカイブである運筆用絵手本を用いた展示からスタートし、それを引き継ぐかたちで、アーカイブ資料に誘発される、mamoruと筆者のほか4名のプロジェクトメンバーの「思索」の視覚化を試みたものである。会場として展示室と特設ウェブサイトの2つが設定され、会期を3つに分けたphaseごとにそれらのビジュアルを変化させようとするメンバーの相互行為が言語によらない対話となってプロジェクトは進行する。実質的なリーダーであるmamoruはおもにテキストと音を用いた映像データをメンバーに送ることで2つの場に介入し、ほかのメンバーは会場の設えならびにウェブサイトにもそのデータを反映させながらイメージを変化させていく。これは常に動き続けるイメージを生むある種のパフォーマンスであり、パンデミック以降に起こった変化に端を発する、実際の展示室およびオンラインにおける展覧会のあり方の探究でもあった。

本共同研究自体は2022年3月で終了、書籍の発行をもって成果発表とするが、今後の課題として、研究会の場では思うように進めることができなかった、具体的な表現実践をともなう共同研究のあり方を探究していきたい。メンバーとは引き続き、協働の可能性を探っていくこととする。



mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ?)」展示風景(2022年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、来田猛撮影)